紅雨樓雜筆

蝶二愁郎

（其九）　手負猪（玉藻記行の一節）

峠にかゝりし頃は、光うすき冬の夕日全く沈みて、闇は足もとよりひろごりぬ。さりともと思ひしことも今はそらだのめ、一夜のやどり乞はゞやと、心あてにして來りし一つ家は、たゞ四本丸木の掘立て柱に、萱葺きの軒かたむき、壁もあらず戸もあらず古筵一枚土間に敷きたるのみ。こは人の常に住むべき宿とも見えず、狩人などの雪を避くるが爲めに、設けたる小舍なるべし。露ふきこぼす風袂にすずしく、草ひき結ぶ枕邊に、有明の月落ちて、時鳥の一聲さくも嬉ゑき頃の、假寢の夢ならんには結ばれもせん。雪を吹きまく山風梢をかすめて、寒さ身にしむ今宵一夜を、とてもかゝる破屋に明かさるべきにあらず。二里とは言へど降り坂、所詮麓に下るより外なしと心さだめつ、雪あかりをたよりに、からくも道を辿りぬ。

腹は漸く空しきことを覺えて、寒さいよ〳〵骨に透りぬ。此上に雪降りいでなば、われは凍ゑ死に死にやせんと、旅に道連れの味を俄に覺えて、心細さこと限りなし、折柄何處とも知れず人の聲す。浮木にあひたる盲龜もかくや、あてなけれど流石に賴もしく、猶進むまゝに聲は漸く近く聞ゆ。さては行手の方にやあらん。人か〳〵と呼ぶに似たり。こは予にむかひて尋ぬる言葉か、そは確かならねど、かかる折のならひ、人ありと知りては聲も出してみたく、予は思はず人なり〳〵と答へぬ。かくてかなたは再び呼ばずなりぬ。さては思ひゑに違はず、予にむかひて呼びたるにや。さるにても、人か〳〵と尋ねしは、そも何が爲にや心得ずと、思ひまどひつゝ半町ばかり進みし頃、ふと前の方を見るに、黑きものゝ立ち居るやうなり。近づくまゝに能く〳〵見れば、まさしく銃を肩にしたる一人の獵人なり

き。かなたは早くも口を開きて、御身は旅の人と見受くるに、年弱き身のかゝる山路の夜の旅はいと危うし。殊に燈火も持ちたまはでといふに、われ初旅の案内も知らで、思はず峠に行き暮らし、宿らんと思ひしは假小家にて、やむなく麓に下らんとせるなり。さては今しかた人か〳〵と呼ばれしは御身なりをか。いかにも予なり。さは何故に呼ばれしや。さればなり、我等は此山の麓に住む獵人なるが、今宵一頭の野猪に手を負はせしまゝ、そが姿を見失ひたれば、われ等今驅り出さんとせる處なり。先頃御身の足音を聞きつけしより、必定彼の猪よと、既に發射(はな)たんと思ひたりしが、少をく怪しう思はるゝまゝ、若し旅人にてはあらぬかと聲かけ見たるに、果して御身なりき。まことに危きところなりしと聞くに、われも思はず身の毛立ちぬ。獵人は猶も言葉をつぎて、このさきにも二町三丁が程を隔てゝ、われ等が仲間そこ此處に見はりし居れば、御身また誤まられては命危うし。されば、是よりはわざと聲をたてゝ、歌などうたひ行き玉へと敎へくるゝに、こはかたじけなを、と禮を述べて別れをが、それよりは何となく氣味わるき心地して、唐うた吟ずる聲もうちふるひぬ。げに彼の狩人の言にたがはず。其さき一里がほどは、十人餘の獵人たち居たりぬ。われ後にはなか〳〵に心强く覺え、旅の同伴得たる思ひして、そを過るごとに一言ふたこと話をかけなどしつ。やう〳〵麓に近くなりし頃、こたまに響く銃の音一發耳をつんざきぬ。獵人等は手負の猪を玄とめしにやあらむ。

（其十）　斷腸

昔桓公と申す君ありけり。蜀といふ國に入りたまひける途、三峽の中にてその下部のひとり、一匹の小猿を捕へえたりぬ。母猿これを見るより、岸の上に手を合して哀を乞ひ、かなをぶこと限りなし。かくて百里あまりになりぬれども、母猿なほその船のあとを追ふて、去るべきけはひも見えず。燒野の

きゞす夜の鶴、子を思ふ道には何れ迷はぬはなきものを、あはれを知らぬ下衆をのこ等、かくまで慕ひきにける母猿の心をはからず、なか〳〵に旅のうさはらし、よき同伴得つと善びあひて、さらに放ちやるべうも見えざりければ、母猿も今はいかに歎くともかひなしとや思ひたりけん。遂に身を躍らして桓公の船に飛び乘り、其まゝに息絶えてけり。無慙にもその腹をさきて見たるに、腸みなずたずたにちぎれ居たりぬ。斷腸といふ文字は、これより出でたるなりとぞ。

（其十一）　捨　女

捨女は丹波國柏原の山里に生れたり。生れながらにさがしく〻て才人にすぐれてたり、甫めて六歳となりけるときに、はやくも

雪の朝二の字二の字の下駄の跡

の句あり。此句いとめでたかりければ、あまねく都鄙に聞えて、あるやんごとなき方より句をたまふ。

萱原に惜しや捨て置く露の玉

年たけて、北村季吟翁の門に入りて和歌を學ぶ。まだ三十路にも滿たずして夫を失ひければ、貞操を守りて僧盤桂の門に入りぬ。或時の歌に

秋風のふきくるからに糸柳こゝろ細くも散る夕かな

げに早く夫を失ひたる彼女が身には、かくも淋しかりつらん。人生は朝露の如し、つひにはかなき浮世に望みを絶ちて、髪をおろして妙融尼といふ。播州網干の里に菴を結びて行ひを澄ましけり。年六十五にてみまかりしとなん。

（其十二）　通　女

通女は讃州丸龜の藩士、井上儀右衛門の女なり。幼き時より慧敏、好みて書を讀み詩歌を善くす。其作はよく老成の人の作にもまされり。年十八の時、京極家の侍女となりて江府に住む。東海紀行といふをあらはせり。初めて舟に乘りて海を渡るとき、風いとはげしく吹きすさみ、舟漂々として搖られければ、

　ゑるへせよ浪間をわけてゆく船のこゝろしられぬ八重の潮風

また、十六夜の月波に映じて、玲瓏玉の如く、風に碎けて散る風情、得も言はれざりければ

　風ふけは月にみかける白玉もくたけて涙のたつにそありける

荒波舷を叩きて眠られざりければ

　乘塞一葉浮。倏忽過他州。風響驚鄉夢。波聲動旅愁。蒼々天與水。浩々月如流。枕袖蓬窓裡。不能只自羞。

九年の後國に歸る。歸家日記といふをものす。いみじく書かれたり。後三田某に嫁す。通女詠ずるところの家集を往事集といふ。僧盤桂と儒佛を論じ、戲に詠みける歌あり。

　常にゆく道ならはこそ世をうみの海士の乘りたる船もたのまめ

（其十三）　一休と一路

一休法師滑稽洒脫、機智を以て世にきこゆ。その頃、泉州境に一路といふものあり。磊落にして衣食のことに拘はらず。生涯詩を吟じ歌を詠ずるを以て樂とせり。或日一休一路の許に音づれて、話の序に問ひけるやう、萬法皆有道如何是一路と、一路その言葉の終るを待たず、直ちに、萬事皆可休如何是一休、と答へければ、さすがの一休も返す言葉なかりしといふ。